

変化動詞における時間的局面的換喩現象

A metonymy-based analysis of the Japanese mutative verbs

菅井三実* 八木健太郎**
Kazumi SUGAI Kentaro YAGI

本稿は、語義的に瞬時的な変化局面を過程として表す変化動詞にあって、語彙的な意味と解釈の意味との間にミスマッチが生じる現象を2つ取り上げ、意味の観点から包括的かつ自然な説明を与えた上で、予想される別案と比較検討し、本稿の優位性を示すことを目的とするものである。

本稿が取り上げる1つ目の現象は、例えば、「月曜日から勉強を始める」のように、変化動詞が、継続性のある時間成分と共に起るとき、動詞「始める」は文字通りには《過程》を表すが、意図された意味としては「始まっている」という結果状態を換喩的に表すと分析されるものである。2つ目は、例えば、「倒壊した家屋から3日ぶりに救助された」のように、変化動詞が再現性のある時間成分と共に起るとき、「3日ぶり」が示すのは「救助」という瞬時的な事象ではなく、「救助」されたことによって生じる《結果状態の局面》として解釈されるというものであり、ここに換喩的な解釈が加わることが例証される。

本文での議論を通じて、語義的な《変化の局面》が《結果状態の局面》として換喩的に解釈されること、すなわち、《結果状態》が《過程》としてコード化され得ることが示される。重要なのは、《結果状態の局面》としての解釈の成否が客観的な規則によって一義的に規定されるのではなく、言語主体の経験的な「解釈(construal)」に帰着される点にある。ここでの分析により、変化動詞に《変化の局面》と《結果状態の局面》を多義的に設定することもせず、また恣意的な内部構造を設定することもなく、関連する現象を自然な形で説明できるというのが本稿の結論である。

キーワード：変化動詞，瞬間動詞，ミスマッチ，過程，換喩

Key words : mutative verb, momentary verb, mis-match, process, metonymy

0. はじめに

本稿の目的は、語義的に瞬時的な変化局面を過程として表す変化動詞にあって、語彙的な意味と実際に解釈される意味との間にミスマッチが生じる現象を取り上げ、意味の観点から包括的かつ自然な説明を与えることにある。第1節で、変化動詞が継続性のある時間成分と共に起るときの事象解釈を分析の対象とし、第2節では、やはり変化動詞が再現性のある時間成分と共に起るときの事象解釈を考察する。そして、最後の第3節で予想される反論を取り上げ、本稿の妥当性を検討する。

1. 変化動詞と継続的時間成分との共起表現

第1節では、本来瞬時的な変化の局面を過程として表すはずの変化動詞が、継続性のある時間成分と共に起るときの事象解釈について議論する。

具体的に問題として取り上げる言語現象は、次の(1)に見られるようなものである。(1a)や(1b)においては、動詞のアスペクト的性質と時間成分(格成分)の時間的性質が一致しているが、(1c)では動詞と時間成分の間に、見かけ上、矛盾が生じている。

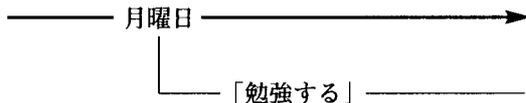
- (1) a. 月曜日から勉強する。
- b. 月曜日に勉強を始める。
- c. 月曜日から勉強を始める。

つまり、(1a)の「勉強する」は、継続性のある事象を表す動詞であり、これと共に起る「月曜日から」も継続的な時間成分であるから、両者の時間的素性は合致している。また、(1b)の「始める」は、瞬時的な局面を切り取るものであるが、これと共に起る「月曜日に」も瞬時的な局面を表す時間成分であるから、やはり動詞と修飾成分は時間的な切り取り方において整合性が保たれている。ところが、(1c)では、動詞「始める」が本来的には瞬時的な局面を表すものでありながら、「月曜日から」という継続性のある事象を表す時間成分と共に起っており、修飾句の時間的な局面の切り取り方と動詞のアスペクトの間に論理的な不整合(ミスマッチ)が認められる。しかしながら、このように表面上、論理的な矛盾の認められる(1c)も、文全体としては文法的容認度に何ら問題はなく、言語使用のレベルでは全く自然に用いられ得る

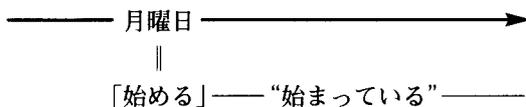
ものである。ということは、(1c)のような文の構造は、言語使用者による把握事態(conceived situation)の解釈(construal)のレベルでは、全く自然に処理され、組み立てられているということである。本節の目的は、このような処理過程を認知過程の観点から一般的に記述することにある。

それでは、(1c)のような構造は、どのように分析され、どのように説明されるのだろうか。(1c)に関して言えば、その意味構造は次のように記述することができる。すなわち、動詞「始める」は本来瞬時的な変化の局面を表すものでありながら、ここでは、変化の結果として生じる「始まっている状態」すなわち「勉強している状態」を表していると言ってよい。このように考えることによって初めて、「月曜日から」という時間成分との共起が可能になり、文全体として整合性のある解釈が成立するからである。このとき、動詞の解釈について、より一般的な形で整理すると、語義的には瞬時的なく変化の局面の局面を表しながら、解釈レベルでは継続的なく結果状態の局面を意味しているということになる。その上で、(1a)と(1c)を対照的に図示するとすれば、次のようになるだろう。

(1a) 月曜日から勉強する。



(1c) 月曜日から勉強を始める。



図(1a)と図(1c)は、それぞれ、(1a)と(1c)の意味的な背景を図式化したものである。(1a)では、「勉強する」という継続性のある事象において、時間成分「月曜日から」が始まりの時点指定しており、至極ノーマルな描写となっている。これに対し、(1c)の「月曜日から」が表す時間的起点は、動詞「始める」そのものの開始時点ではなく、「始める」ことの結果として成立する「勉強している状態」の開始時点にほかならない。つまり、時間的な継続関係の下で、本来<変化の局面>を表すはずの記号が、それに後続する<結果状態の局面>を表しているということになる。本稿では、このように、変化動詞が結果状態で解釈される現象を、<換喩シフト>と呼ぶこととし、以下、複数の種類の言語現象が、この概念によって統一的に分析できることを例証したい。^[11]

類例には、次のようなものが挙げられる。

- (2) a. 与野党の全面対決が続いていた参院は、週明けから正常化されることになった。
- b. 平成13年4月1日より家電リサイクル法が施行されました。
- c. 金輪際、お前とは縁を切る。

(2a)では、「正常化(する)」という瞬時的な変化を表す述語が、継続的な期間を表す下線部の「週明けから」と共起しているが、語義的な「正常化される」という<変化の局面>が「正常化されている」という<結果状態の局面>として換喩的に解釈されていることは、直感的にも容易に理解できる。同様に、(2b)や(2c)も、継続性のある下線部の時間成分によって、瞬時的な変化の局面を表す述語が修飾されているが、それぞれ「施行されている」や「縁を切っている」という結果状態として解釈される。いずれも、変化動詞の換喩変換を想定することで、自然に説明を与えることができるのである。

以上のことは、(3)のように定式化できる。

- (3) 語彙的意味として変化という<過程>を表す動詞が、換喩的に<結果状態>を表すことがある。逆に言うと、<結果状態>は<過程>としてコード化され得る。

ただし、変化動詞の<変化の局面>から<結果状態の局面>への換喩シフトは、機械的に保証されるものではない。換喩シフトが働くためには、一般に比喩が機能するときと同じように、経験的な解釈のレベルで“文字通りの意味”と“意図される意味”との間に、山梨(1992)が言うような「推論」が働く必要がある。その推論は、経験的な解釈に基づくものであり、必ずしも客観的に一般化できるものではないが、共同主観的(intersubjective)に共有されている限り、ある程度の記述は可能である。本稿でいう換喩シフトの場合、<変化の局面>に後続する<結果状態の局面>が言語主体にとって価値のある状態として認められるかどうかにかつ着され、その成否は連続的な程度差をもつものと想定しなければならない。^[12]

このことは、次のような例によって、具体的に確認できる。

- (4) a. 指揮者が曲の途中で指揮棒を変えた。
- b. 指揮者が曲の途中から指揮棒を変えた。

(4a)のように、「指揮棒を変える」という<変化の局面>が「デ格」の時間成分で修飾されたときは、「指揮棒を変える」という<変化の局面>が単に「曲の途中」

という(時間にある程度の幅を持った)時点に位置付けられるのに対し、(4b)のように「指揮棒を変える」という<変化の局面>が「カラ格」の時間成分で修飾されたときは、時間的な起点が指定されることで、継続的な状態の解釈が誘発され、指揮者が「指揮棒を変えた」ことの結果として「別の指揮棒を使っている」という状態を描いているものとして解釈される。逆に言えば、次のペアで示されるように、<結果状態の局面>が十分な顕著性をもたない場合は、「カラ格」の時間成分と共起させても容認度は低くなる。

- (5) a. 指揮者が曲の途中で指揮棒を折った。
 b.??指揮者が曲の途中から指揮棒を折った。

このペアでは、上述の(4)と異なり、(5b)の容認度が低くなるが、これは「指揮棒を折った」という<変化の局面>が、その結果として生じる継続的な状態を有意に誘発しないためにほかならない。このように、結果状態の換喩解釈が、原理的に話者の解釈(construal)に依存することを確認しておきたい。^[3]

最後に、関連する現象として「ている」形の解釈について触れておきたい。

- (6) a. マラソンは正午にスタートする。
 b. マラソンは正午からスタートする。

上掲の(1)において、(1a)と(1b)がともに成立したのと異なり、この(6)においては、(6b)の「正午から」のように継続性を持つ時間成分を共起させると、容認度が低くなる。これは、マラソンにおける「スタート」が、走行状態を導くための機械的な局面としてではなく、競技全体の中で独立性の高い固有の局面として理解され、それだけ固有の時間的な瞬時性が強く解釈されていることに帰着される。瞬時的な<変化の局面>という文字通りの意味が強ければ、転義されにくくなるのは当然だからである。^[4]

以上、本節では、変化動詞が「～から」のような継続性のある時間成分と共起する現象を取り上げ、過程と結果の間に換喩シフトが働くことで、変化動詞が<結果状態の局面>として換喩的に解釈されることを例証した。

2. 変化動詞と再現性時間成分との共起表現

第2節では、変化局面を過程として表す変化動詞が再現性のある時間成分と共起するときの事象解釈について議論する。

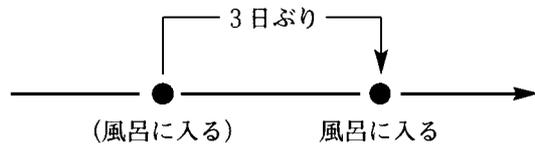
具体的に本節で取り上げる現象は、次のようなものである。

- (7) a. 忙しい日が続き、ようやく3日ぶりに風呂に入った。
 b. 倒壊した家屋から3日ぶりに救助された。

(7)における「3日ぶり」のような語句は、語義的に再現性を含意するものであり、(7a)では、「風呂に入る」という事象が「3日前」にあり、それと同じ事象が3日間という時間的間隔をあけて再現されたと解釈される。これに対し、(7b)のタイプの文は、国広(2002)でも触れられているように、論理的な不整合を含んでいる。実際、「3日ぶりに救助された」と言うとき、必ずしも3日前に「救助される」という事象が起こっているわけではない。もちろん、本当に「救助された3日後に再び救助される」という数奇な人生を送っている人もいないとはい切れないが、ここでの問題点は、(7b)のような表現が、たとえ3日前に「救助された」という先行事象がなくても成立するというところにある。しかし、この言語現象もまた、言語表現のレベルで論理的な矛盾を含んでいながら、全体として文法的な容認度に何ら支障はなく、言語使用のレベルでは全く自然に用いられ得るものである。したがって、ここで考えなければならないのは、「3日ぶりに」という時間成分が再現性を失ったのか、あるいは再現性が別の形で保持されているかという点であるが、結論から言うと、後者が正しいと考えるのが本稿の立場である。^[5]

具体的な分析は、基本的に、第1節で取り上げた換喩シフトのときの方法に準じる。(7b)に関して言えば、意味構造を次のように記述することができるだろう。すなわち、動詞「救助される」は、本来、瞬時的な変化の局面を表すものであるが、ここでは変化の結果として生じる「救助されている状態」すなわち「安全にいる状態」を表しているのである。このように考えることで、「3日ぶり」という時間成分との共起が可能になり、文全体として整合性のある解釈が可能になる。ただし、(7b)において「ぶり」が表す再現性は二重の意味で複雑である。まず、<変化の局面>を表す述語「救助される」が「救助された」ことによって生じる<結果状態の局面>に換喩シフトされる点では、第1節の現象と同じであるが、再現される状態が「救助を必要とするような危険な状態に陥る、その前の状態」であり、再現される状態が明示的に与えられていないからである。要するに、語義的に<変化の局面>を表しながら、解釈として<結果状態の局面>を意味しているということであり、(7a)と(7b)を対照させると、視覚的には次のように図示できる。

- (7a) 3日ぶりに風呂に入った。



(7b) 3日ぶりに救出された。



図(7a)と図(7b)は、それぞれ、(7a)と(7b)の解釈過程を模式的に示したものである。(7a)では、「風呂に入る」という事象が3日という間隔をあけて再現された事象を図示しており、「ぶり」の用法としては至極ノーマルと言ってよい。このとき、「3日前」に生じた事態とは「風呂に入る」という行為そのものであり、動詞によって明示的に保証されており、推論を発動することなく容易に確定できる。他方、図(7b)において、2つの黒丸のうち、左側が「倒壊した家屋の下敷きになった」時点を示し、右側の黒丸が「救助された」時点を示すものとする。このとき、右側の黒丸が瞬時的な<変化の局面>を指し、“安全な状態”と指示された太線部は、<変化の局面>と時間的な継続関係で結びついた<結果状態の局面>であって、「救助される」という<変化の局面>から換喩的に導き出された<結果状態の局面>と記述される。しかも、「ぶり」によって再現的な事態として解釈されるのは、図(7b)において“通常の状態”および“安全な状態”と指示された部分であり、「3日前」に生じた事態も、言語形式によって明示的に与えられておらず、推論によって想定されなければならない。ここに、前節で挙げた第1のタイプとの差異がある。

類例に次のようなものが挙げられる。

- (8) a. 尼崎公害訴訟が12年ぶりに和解した。
 b. 共和党が8年ぶりに政権を奪還した。
 c. チェス世界王者15年ぶりにタイトル失う。
 d. 平均株価が半年ぶりに20,000円を割り込んだ。

いずれも、新聞記事から採ったものである。(8a)において、兵庫県の「尼崎公害訴訟が和解した」のは初めてであり、12年前にも和解があったわけではない。また、(8b)～(8d)において、「8年前」「15年前」あるいは「半年前」に起こったのは、それぞれ「政権を失った」、「タイトルを獲得した」あるいは「20,000円を超えた」という反義的な事象であり、再現されているのは、いずれも換喩的な<結果状態の局面>と解釈される。

さらに、本稿のいう換喩シフトが機能する現象として、次のような類例もある。

- (9) a. 苦勞して塗った色をまた白に戻した。
 b. もう一度実家に帰ります。家業を継ぐ決心が出来ましたから。

(9a)や(9b)の下線部の副詞句「また」や「もう一度」は、語義的に繰り返しを含蓄するものであり、語用論的にトリガー(trigger)と呼ばれるものである。これらは変化動詞を修飾しているが、やはり、当該の過程的事象が必ずしも以前に生じているとは限らないことに注意されたい。すなわち、(9a)の発話は、「白に戻す」という行為が初めて行われた場合でも用いられ得るのであって、その場合は、「色を消した結果として白くなった状態」が「はじめに白紙だった状態」の再現として把捉されている。同様に、(9b)も本格的な帰郷が初めての場合でも発話され得るのであって、その場合は「実家に帰ってきた結果状態」、つまり「実家にいる状態」が「以前実家にいたときの状態」の再現として把捉されているものと理解できる。逆に言えば、(9)において動詞の語彙的なアスペクトと副詞的な時間成分「また」や「もう一度」との意味関係を適切に処理するためには、事態解釈において<変化の局面>から<結果状態の局面>への換喩的シフトが働かなければならないとも考えられる。^[6]

本節の最後に、変化動詞が「ぶり」などの再現性のある時間成分との共起現象における換喩解釈の成立可能性について、簡単に確認しておきたい。前節で、変化動詞が「から」などの継続性のある時間成分と共起する現象を議論したときにも述べたことと同様、変化動詞が「ぶり」などの再現性のある時間成分と共起するときに換喩解釈が適切に成立するかどうかは、究極的には、<結果状態の局面>が言語主体にとって価値のある状態として認められるかどうかという経験的な解釈に帰着される。実際、次のペアにおいて、(10a)では<変化の局面>から<結果状態の局面>を引き出すことが可能であるが、(10b)では<変化の局面>から<結果状態の局面>を引き出すことは難しい。

- (10) a. 20年ぶりにロックバンドを結成した。
 b. ??20年ぶりにロックバンドを解散した。

(10a)では、以前の「結成」から今回の「結成」まで20年という時間が経過したという原義に忠実な解釈の他に、「解散」から「再結成」までが20年だったという解釈が成り立つ。例えば、25年前に初めてバンドを結成し、5年間活動した後に解散したような場合、その「解散」から20年の時間を経て(再)結成されたという事象を描く

ものである。これに対し、(10b)は「解散」という<変化の局面>が再現されたという解釈のみが可能であり、「解散している状態」という<結果状態の局面>が再現されたとする解釈は生じない。後者の解釈に関して、(10a)が容認され、(10b)が容認されないことを説明するためには、経験的に「ロックバンド」にあっては結成されている状態が価値を持つが、解散している状態には価値が認められがたいという共同主観的な理解に求めるほかない。この点において、換喩解釈の成立が言語主体の経験的な解釈に帰着されることを確認しておきたい。

以上、本節では、変化動詞が「ぶり」や「また」のような再現性のある時間成分と共に起る現象を記述し、変化動詞が<結果状態の局面>で換喩的に解釈されるとともに、再現される過去の事象が言語形式によって明示的に保証されていないにもかかわらず、推論によって適切に想定されるメカニズムを明らかにした。

3. 妥当性の検討

第1節および第2節では、変化動詞が結果状態として解釈される現象を、換喩シフトという観点から分析した。この分析は、本稿が初めて提案する独自のものであるが、同様の現象に対して別の観点から分析される可能性もある。以下では、予想される2つの別案と本稿での分析との優劣を検討し、さらに現象の分析を加えて本稿の優位性を確認したい。

第1の別案は、混淆(contamination)という可能性を指摘するものであり、例えば、次のような説明が考えられる。

- (11) a. 月曜日から勉強を始める。
- b. 月曜日に勉強を始める。
- c. 月曜日から勉強を始めている。

(11a)が、本稿で問題にしているミスマッチ表現であるが、これを混淆と分析するとき、その構成要素としては、(11b)や(11c)のようなものが想定されるだろう。(11b)は動詞も時間成分も瞬時的局面を表しており、(11c)は動詞も時間成分も継続的局面を表しているため、ともに時間的な切り取り方という点で何ら問題はない。その上で、(11b)と(11c)の混淆によって(11a)が生じたという分析を主張することも理論上は可能である。しかしながら、混淆説には少なくとも欠点が3つある。一つは、(11a)に対して常に(11b)や(11c)のような構成要素が想定できるわけではないという点である。実際、次のような例に対しては、具体的に混淆の構成的表現を想定することは難しい。

- (12) a. 来シーズン以降、現役を引退する。

- b. 15歳で家を飛び出してから30年ぶりに故郷に帰った。

これらの例を混淆として説明すると、具体的に構成的表現を想定することは不可能か、極めて不自然なものにならざるを得ない。したがって、混淆説によって処理できるのは、問題になっている現象の一部に限られ、包括的な説明原理とはならない。

混淆説における2つ目の欠点は、意味的な混合現象の問題である。すなわち、もし混淆によって生じたのであれば、構成要素の意味構造が混ざり合っていなければならないが、(11a)や(12a)には、混淆による意味の混合が認められないというものである。

混淆説における3つ目の欠点は、生産性の問題である。そもそも、混淆という現象は偶発性の高いものであって、本稿が取り上げているような文レベルの生産性の高い現象については、安易に混淆という概念を適用するべきではないと思われる。

次に、第2の別案として予想されるのは、Pustejovsky (1988, 1995)、森山(1988)および影山(1996)などで提唱されているように、変化動詞には語彙構造の中に、そもそも<変化の局面>とともに、初めから<結果状態の局面>が組み込まれていると想定するものである。この考えは、例えば、動詞「始める」によって表される事象(イベント)には「始める」という瞬時的な変化の局面と「始まっている」という継続的な状態の局面の両方がサブイベントとして語義的に組み込まれているというものであり、視覚的には次のように表される。

- (13) 変化動詞の事象全体 = {[変化の局面] + [結果状態]}

このとき、[] が変化動詞の表す事象の全体であり、その中に [] で表されるサブイベントが含まれるものと想定され、継続的な時間成分が共起するときは、自動的に継続的な状態のサブイベントを修飾できるようになっているというものである。¹⁷⁾

この考えを「サブイベント説」と仮称するとき、サブイベント説にも3つの欠点がある。第1の問題点は、サブイベントの性格付けに関するものである。実際、森山(1988:143)自身が「持続的な動きの局面の中でも典型的な運動の局面は[過程]であるのに対し、典型的に非運動的なものは[結果持続]である」と述べているように、この2つの局面を変化動詞の基本アスペクト形式が本来的に表す意味として完全に同等に並べることは、適切ではない。もし、<変化の局面>と<結果状態の局面>が並列的に設定されているのであれば、時間に関する副詞が共起するとき<変化の局面>と<結果状態の局面>を同じように修飾するはずであるが、次の例が示すように、

実際には、＜変化の局面＞を修飾するときと＜結果状態の局面＞を修飾するときとで容認度に微妙な差異が出る。

- (14) a. 突然、ロックバンドを解散した。
b. 突然、仕事をやめた。
- (15) a. しばらくロックバンドを解散した。
b. しばらく仕事をやめた。

(14)において「突然」という副詞は、動詞「解散する」や「やめる」の＜変化の局面＞を修飾しているが、この場合、容認度に何ら問題はない。

また、サブイベント説では、(15)の副詞「しばらく」が、動詞「解散する」や「やめる」の語義的意味の一部である＜結果状態の局面＞のみを修飾することになるが、これらの例の容認度が、次の(16)の各例に比して多少ながら落ちることへの説明は、用意されていない。

- (16) a. しばらくロックバンドを解散していた。
b. しばらく仕事をやめていた。

このとき、(15)に比して、(16)の容認度が安定することに注目されたい。逆に言うと、(15)は、実は容認度において不安定であることが浮かび上がる。(15)の容認度が相対的に低くなることは、本稿のように、結果状態の意味が副次的な解釈に過ぎないことを明示的に記述することで説明できるのである。^[8]

サブイベント説の2つ目の問題点は、予測可能性の問題である。次に確認される事実、動詞によって＜結果状態の局面＞を表すものと表さないものが決まっているわけではないということである。森山(1988:145)は、＜結果状態の局面＞を表す動詞と表さない動詞は語彙的な意味によって決まるとし、具体的には、変化が不可逆的な動詞は、その動きの結果においても持続がないので＜結果状態の局面＞を表さないと述べている。確かに、次の例が示すように、「死ぬ」や「消滅する」は、変化が不可逆的であるが、＜結果状態の局面＞を表すことはできない。

- (17) a.??花瓶がしばらく壊れた。
b.??その日から花子は息を引き取った。

しかしながら、＜結果状態の局面＞で解釈することの可否を動詞の語彙的性質に帰着させる分析は、実は正しくない。次の例が示すように、不可逆的な変化を表す事象であっても＜結果状態の局面＞を表すことは可能だからである。

- (18) a. 宮澤喜一氏は2001年1月6日から
初代財務大臣になる。
b. ベルリンの壁が28年ぶりに消滅した。

(18a)において、述部「初代財務大臣になる」は変化の局面を表しているが、一度「初代財務大臣」になった人は永遠に「初代財務大臣」であって、そうでない人に戻ることはできないので、不可逆的な変化と考えなければならない。しかし、それにもかかわらず、「初代財務大臣になる」という述語は、継続性のある時間成分「2001年1月6日から」と自然に共起し、換喩的に「初代財務大臣である」という＜結果状態の局面＞として解釈することができる。また、(18b)も全く問題なく容認されるが、これは、「ベルリンの壁」が「消滅する」ことが、そのこと自体の歴史的ないし政治的重大性は言うまでもなく、結果として生じる「(旧)東西ドイツの分断が終焉する」こと、すなわち、継続的に「分断が解消された状態」として、言語主体にとって価値をなすためであると理解される。逆に言えば、変化動詞が＜結果状態の局面＞で解釈されるかどうかは、事態の不可逆性や動詞の語彙的意味によって客観的かつ一義的に決められているものではなく、原理的に言語主体の解釈に帰着されるということである。^[9]

サブイベント説における3つ目の問題は方法論上の欠点である。そもそも、森山(1988)には2つのサブイベントを想定する根拠が明示されていない。もし、「しばらく～した」のような例において「しばらく」が「～する」ことの結果状態を修飾することが根拠であるならば、サブイベント説は「しばらく～した」のような修飾構造を説明する原理にはなり得ない。論理的なトートロジーに陥るからである。逆に、「しばらく～した」のような修飾関係をサブイベント説で説明するというのであれば、2つのサブイベントを想定する独立した根拠を別に示さなければならない。

以上、本節では、本稿で問題にしているミスマッチ現象について、混淆説とサブイベント説の不備とを明らかにし、本稿の分析の優位性を確認した。

4. 結論

本稿では、変化動詞が結果状態として解釈される現象を取り上げ、換喩シフトという観点から統一的な説明を与えることを試みた。本文での議論は次のように要約される。

- [i] 変化動詞が「～から」のような継続性のある時間成分と共起するとき、語義的なく＜変化の局面＞が＜結果状態の局面＞として換喩的に解釈される。
[ii] 変化動詞が「ぶり」や「また」のような再現性の

ある時間成分と共に起るとき、換喩的に「結果状態の局面」で解釈されるとともに、再現される過去の事象が言語形式によって明示的に保証されていないにもかかわらず、推論によって適切に想定される。

[iii] <結果状態の局面>としての解釈の成否は、客観的な要因によって一義的に規定されるものではなく、言語主体の経験的な「解釈(construal)」に帰着される。

これにより、変化動詞に「変化の局面」と「結果状態の局面」を多義的に設定することもせず、また恣意的な内部構造を設定することもなく、関連する現象を自然な形で説明できるというのが本稿の最終的な結論である。ただ、「結果状態の局面」が「変化の局面」としてコード化される詳細な条件や積極的な動機付けを明らかにすることは、今後の課題としたい。

注

- [1] 変化動詞という用語について簡単に補足しておきたい。変化動詞と言うとき、本稿では「始める」のように、変化が瞬時的なものを考察対象としているが、変化動詞には「成長する」のように変化が瞬時的でないものもあり、そうした非瞬時的な変化動詞に(1c)のような現象は観察されない。このことの原因は明らかではないが、議論の都合上、本稿では、変化動詞という用語を、Vendler(1967)の「到達動詞(achievement verb)」と同じく「瞬時的な変化を表す動詞」として、狭義に用いることとする。
- [2] ここでいう《結果状態》は、言語記号によって明示的はコード化されていないが、こうした《状態》を想定することの必要性については、すでに定延(1993)に具体的な言語事実に基づく指摘がある。また、「共同主観性(intersubjectivity)」というのは“個々人の主観が(ある程度)他人との間で共有される”という仮説であり、「間主観性」「間主体性」「相互主体性」などともいう。もとは哲学者フッサールの用語であるが、主観性の問題を論じるのに有効な概念として注目されている。日本では、廣松(1972, 1994)や増山(1991)などの哲学的研究が知られているが、鯨岡(1999)や浜田(1999)では発達心理学の研究にも援用されている。また、間主観性は情報学の西垣(1999)でも援用されており、この概念に基づくコミュニケーションの論考に圓岡(1999)がある。
- [3] Tobin(1993:17)は、英語動詞のアスペクト研究の中で有標性について論じ、無標は「特に結果を要求することなく、結果に関して中立であり、過程の観点から見ても結果の観点から見てもよい」とし、有標は「特

に結果という見方をとるもので、結果・目標・帰結・終結・目的・限界点などの観点から捉える」と定義した。この観点から言うと、変化動詞が無標の解釈として過程を表し、有標の解釈として結果を表すという本稿の分析は、Tobin(1993)の動詞アスペクト論と、相互に理論的な補強を与えるものと思われる。

- [4] 本節の分析に関連する現象を2つ挙げておきたい。1つは、「店の外にまで人が溢れている」のように「変化の局面」が背景化されて「結果状態の局面」だけが前景化されている現象で、国広(1985a, 1985b, 1989)が「痕跡的認知」と呼んだものであるが、この「痕跡的認知」も本稿で取り上げている現象に包摂されるものと考えられる。両者とも過程から結果にまたがる時間的な換喩現象であり、両者の差異は、本稿で取り上げている現象では副詞句的な時間成分が「結果状態の局面」を導き出しているのに対して、痕跡的認知においてはアスペクト形式「～テイル」が導いているという点だけである。もう1つの関連現象は、サ変動詞の語幹をもとに派生した名詞に関するものである。例えば、動詞「開始する」の語幹から「開始中」のような名詞が派生する場合も、同様の時間局面的換喩が認められる。このとき、「開始中」が指す時間的局面的は、「開始する」という過程が続いている状態ではなく、むしろ「開始」した結果の状態を指しているからであり、この点で「開始中」における「開始」は、換喩的に「変化の局面」が「結果状態の局面」として解釈されていることが分かる。類例には「閉鎖中」や「停止中」が挙げられよう。
- [5] この際、「ぶりに」が被修飾部の表す事態全体の再現を含意するという仮定を疑うことも考えられるかもしれない。実際、『新明解国語辞典[第5版]』では「ぶり」の項に「①一定の時間的間隔の後に、以前と同じ状態が具現することを表す、②ある事が実現するまでにそれだけの時間の経過が必要であったことを表す」とした上で、もともと②が誤用だったと補記している。ただ、本稿では、①における周辺的な用法を分析することで、②の用法をカバーすることが可能になるとの見通しがあるので、どの用法の「ぶりに」にも再現性が保持されることを前提に議論を進めることにする。
- [6] 国広(1995)では、例えば「再び溪谷へ戻ってきた」のような例の「再び」を「結果副詞」と位置付け、「庭をきれいに掃いた」のような文における「きれいに」と同様に、動詞が表す動作そのものではなく、動作の結果を限定すると記述しているが、そのことに対する理論的な説明は与えられていない。
- [7] 事象の種類として、Vendler(1967)流に「状態(state)」「過程(process)」「推移(transition)」を想定するとき、

Pustejovsky(1991:56)は「状態」と「過程」が均質的であるのに対し、推移には少なくとも2つのサブイベントがあるという。

[8]この点に関して、影山(1996)は、変化動詞が具体的な文の中で<結果状態の局面>を表すか否かは語用論に属する問題であるとし、全ての変化動詞が本来的には<結果状態の局面>の局面を内在すると述べている。しかしながら、例えば、立ちあがろうとする相手に向かって、状態を維持するよう求めるとき「そのまましばらく座りなさい」とは言わず、「そのまましばらく座っていなさい」としなければならない。つまり、変化動詞においては、「しばらく」と共起したときでも<変化の局面>がデフォルト的解釈であり、<結果状態の局面>の解釈が有標のものであるということ、サブイベント説は正しく反映していない。

[9]本稿では時間を表す副詞的成分を考察対象としているが、修飾における<変化の局面>と<結果状態の局面>の揺れは、様態を表す副詞的成分についても言える。例えば「複雑に変化する」のような用例で、形容動詞「複雑に」が動詞「変化する」を修飾するとき、<変化の局面>を修飾する解釈と<結果状態の局面>を修飾する解釈の2通りがある。前者は「変化の仕方が複雑」である様子を描き、後者は「(変化の仕方は単純であっても)変化した結果の状態が複雑」である様子を描くことになるが、これにより、様態を表す副詞的成分にあっても、動詞の修飾において<変化の局面>と<結果状態の局面>の2通りが観察され、しかも、話者の経験的な解釈(construal)に帰着されることが確認できると思われる。

参考文献

- 影山太郎 1996『動詞意味論』くろしお出版。
- 鯨岡 峻 1999『関係発達論の構築——間主観的アプローチによる』ミネルヴァ書房。
- 国広哲弥 1985a「言語と概念」『東京大学言語論集 '85』(東京大学文学部言語学研究室)pp.17-23.
- 国広哲弥 1985b「認知と言語表現」『言語研究』第88号, pp.1-19.
- 国広哲弥 1989「多義と認知」『日本エドワード・サピア協会ニュース・レター』3: pp.22-32.
- 国広哲弥 1995『日本語誤用・慣用小辞典[続]』講談社現代新書。
- 国広哲弥 2002「認知と場面」『日本認知言語学会論文集』第2巻, pp.222-224.
- 定延利之 1993「事態認知モデル構成要素としての状態の必要性」『日本認知科学会第10回大会発表論文集』pp.76-77.
- 圓岡偉男 1999「他者と社会システム」川野健治・圓岡偉男・余語琢磨(編)『間主観性の人間科学——他者・行為・物・環境の言説再構にむけて』言叢社, pp.205-227.
- 西垣 通 1999『こころの情報学』筑摩書房。
- 浜田寿美男 1999『「私」とは何か——ことばと身体との出会い』講談社。
- 廣松 渉 1972『世界の共同主観的存在構造』勁草書房。
- 廣松 渉 1994『新・哲学入門』岩波新書。
- 増山真緒子 1991『表情する世界—共同主観性の心理学』新曜社。
- 森山卓郎 1986「日本語アスペクトの時定項分析」宮地裕(編)『論集日本語研究(一)現代編』明治書院, pp.78-116.
- 森山卓郎 1988『日本語動詞述語文の研究』明治書院。
- 山梨正明 1992『推論と照応』くろしお出版。
- Pustejovsky, J. 1988 "The Geometry of Events," In Tenny, Carol L. (ed.) *Studies in generative approaches to aspect*, Cambridge, MA: Lexicon Project, Center for Cognitive Science, MIT, pp.19-39.
- Pustejovsky, J. 1991 "The syntax of event structure," In Beth Levin and Steven Pinker (eds.) *Lexical & conceptual semantics*, Cambridge, MA; Oxford: Blackwell, pp.47-81.
- Pustejovsky, J. 1995 *The generative lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Tobin, Y. 1993 *Aspect in the English verb: process and result in language*. London: Longman.
- Vendler, Z. 1967 "Verbs and times," In Vendler, Z. *Linguistics in Philosophy*, Ithaca: Cornell University Press, pp. 97-121.